『１０人家族』

昨年８月に伯母（母の姉）が亡くなった。ショックだった。伯母とは言え、私にとってはあまりにも身近な存在であった。また元気な姿を見たかった。予期せぬ早い別れに、言葉を失った。

１０人家族…、子供心にそう思っていた。私には兄がいるので、両親と合わせて４人家族だが、伯母の家族も４人。そして祖父母（母方）を入れて、合わせて１０人だった。本来は皆、九州、中国・四国といった南方の出身であったのだが、私が生まれた時には、偶然、函館に移り住んでいて、何かと言えばいつも集まり、よく一緒にドライブや旅行にも出かけた。特に私の実家が今の場所に移ってきてからは、３世帯がすぐ近くに位置する事となり、毎日のように行き来していた。

従兄弟２人は私にとっては兄と姉のような存在だった。４歳上の従姉のＥちゃんは特に私を可愛がってくれ、いつも土曜日になると、２人で祖父母の家に泊まり、布団にもぐりこんで、お菓子を食べながらテレビドラマを一緒に見続けていたものである。

大晦日には我が家に集まるのが恒例となっていた。一緒に食事をした後、ほろ酔い加減の伯父がシャンソン風の歌を歌い、皆を笑わせる。家族対抗マージャン大会をしたり、紅白歌合戦を見たりと、１年の締めくくりの日に楽しいひとときを一緒に過ごした。私たちの成長とともに、１０人が揃うことはほとんど無くなった。私も高校卒業後に函館を出たが、休みになっても実家に帰らないことがあった。

そんなある日、永遠に１０人が揃うことができなくなってしまった。Ｅちゃんが海外留学中に不慮の事故により急逝したのである。私が大学３年の時であった。夏休みで帰省していた私は、その日、友人の家で遅くまで遊んでいた。深夜２時頃に帰宅した時、両親がまだ起きている事に驚いたが、直後に、Ｅちゃんの死を告げられた。あまりにも突然すぎて涙も出なかった。翌日、深い悲しみの中、伯父と伯母は海外へ渡った。ちょうど金沢に旅行中だった祖父母は急遽、函館に戻ってきたが、空港の荷物待ち受け場所でＥちゃんの死を私が告げた。立ちすくみ涙する祖母の肩をそっと抱き寄せた。

Ｅちゃんが函館を離れてからは、ほとんど会うチャンスが無かった。せめてお別れをしたかったし、大人同士としても一杯話をしたかった。Ｅちゃんの死は私たち家族に深い悲しみを落としたが、時とともに少しずつ気持ちを和らげてくれた。

１０年以上経ってからだろうか、伯父や伯母とも自然と、Ｅちゃんとの思い出を話せるようになった。やがて、祖父母は老い、天寿を全うした。１２年前の正月、祖父は家族に囲まれ、皆が驚くくらいに腹一杯食事を摂っていたが、その３週間後に病院で亡くなった。祖母は早くに脳梗塞で倒れ、闘病生活を送っていたが、６年前に在宅で、娘たちに看取られながら静かに旅立っ

た。長年、中心となって祖母の介護をしていた伯母も気づいたら年老い、少しずつ自らも体調を崩していたようである。一昨年、急に伯父と伯母が函館を離れ、息子の居る名古屋へ移り住むことが決まった。２人とも体力に自信が無くなり、今のうちにという思いがあった。

３月末、空港で見送り、握手と笑顔で別れた。長年、函館で共に過ごした思い出を振り返ると、とても寂しくて涙が出そうだったが、またすぐに会えると確信していた。私は、あらかじめ用意していた感謝の手紙を２人に渡した。しばらく、元気に暮らしている便りが届き、時々、電話でも元気な声を聞く事があった。名古屋にもすっかり慣れたようであったし、息子夫婦が身近に居ることで何かと嬉しそうな様子だった。

しかし、１年後、２人とも体調を崩したという知らせが届いた。特に伯母の方は困難な病気に見舞われ、入院を強いられることとなった。それでも生命に関わるほどのものではない、と誰もが信じ、私もそのうちお見舞いに行こうと思っていたのだが、突然の脳出血という形で、容態は急変してしまった。そして、空港での別れから一度も会う事ができないままに、不帰の人となったのである。息子の元で暮らし、まだまだ親子水入らずの時間をいっぱい過ごして欲しかった。色々な思い出がまた頭の中を駆け巡り、ただただ涙がこぼれ落ちた。

人は皆死ぬということは分かっている。自分だってもう４６歳になり、とっくに人生を折り返している。親だって、伯父、伯母だって年老いるはずである。そして、残念だが、必ず別れがやってくる。気持ちの準備ができる別れもあれば、また突然の予期せぬ別れもある。どちらも辛いが、少なくとも、日頃から悔いのない関わりが大切なのだとつくづく感じる。

昨年の大晦日は、いつものように実家で食事をした。１０人集まっていた。両親と兄の家族４人、そして私の家族４人であった。メンバーは変わったが、やっぱり１０人いると賑やかでいい。昔は祖父が一生懸命にカメラを握り、いっぱい写真を撮っていた。今は父がそうである。ふと、以前に見た映画「新・喜びも悲しみも幾歳月」が頭に浮かんだ。人生はまさにドラマである。喜びも悲しみも含めて、色々なことがあるから、生きていることを実感できるのかもしれない。

（平成 19 年 5 月 16 日　著）